

4 意見聴取会での意見発表概要

(4) 東部地区

日 時：平成19年1月21日（日）14:00～16:00

場 所：宮城県石巻合同庁舎 5 階大会議室（石巻市東中里一丁目4 - 3 2）

出席者：藤村 重文委員長

意見発表者：志賀 勝利 氏

小野寺 征人委員

猪又 聡 氏

櫻井 弥生委員

石垣 好良 氏

佐々木 悦子委員

須田 佑 氏

山田 光彦委員

木村 正樹 氏

佐々木 義昭委員

遠藤 学 氏

<概 要>

志賀勝利氏

- ・ 30数年前に学区制の導入を検討し始めたときから学区制自体に疑問を感じていた。その当時既に学区制導入をしていた東京都は都立高校の地盤沈下から、見直しをしようとしていた。
- ・ 学区制導入の最大の理由は受験戦争の過熱化防止であったが、学区制導入後20数年が経過しているが、受験戦争は続いている。現在、社会が学歴を重視している以上、流れは変えられない。
- ・ 危惧すべきことは、学区制導入の間に宮城県の学力が低下したことである。
- ・ 学区制撤廃反対の立場にある人たちは学校間格差の是正を挙げているが、学校間に格差があってはいけないのだろうか、疑問に思う。
- ・ 受験戦争はかわいそうではあるが、それには避けて通れない面があり、強い心を持つ子どもに育てることが大切である。生きていく上で、格差のない社会は存在しない。
- ・ 自分の経験から、挑戦して駄目だったことよりも挑戦できなかったことの方が悔いが残る。挑戦して、敗れて悔いなしという精神も大切である。
- ・ 受験戦争は大学受験も同様であり、高校受験だけが取り上げられるべきではない。
- ・ 受験戦争と表現されているが、受験競争と表現すべきではないかと思う。競争は避けがたいことであり、社会に出ればますます激烈な競争が待ち受けているのであるから、競争を否定する風潮は問題である。自分の子どもを優しく育てるだけでなく、強さの教育も必要なのではないか。
- ・ 受験戦争の過熱化や仙台一極集中がいわれているが、私学が着実に力をつけており、都立高校の二の舞になるのではと危惧している。
- ・ 子どもたちにチャレンジできる環境と一度や二度の挫折に負けない精神力を養える教育環境を整えるべきである。そのためにも、子どもたちが学区制に縛られることなく、自分の目指す高校受験できるようにすることが大切である。
- ・ それぞれの高校には伝統があり、伝統はすぐには作れないものである。在校生の大多数が反対している共学化を推進するのは間違っている。見直す勇気を持ってほしい。

猪又聡氏

- ・ 気仙沼市内の普通科を希望する生徒のほとんどは、気仙沼市内の気仙沼高校、気仙沼西高を、南三陸町の生徒は志津川高校を志望する。1時間以上かけて遠くの高校に通うよりは、自分たちが通いたい魅力ある高校を自分たちの手で作るという気持ちで通っている。与えられた特色ある学校、魅力づくりという高

校を求めているわけではない。

- ・ 遠距離通学をしている子どもの多くは、一般入試で落ちて二次試験で合格した不本意入学である。私の教えた子どもは宮城交通のバス路線が廃止されたことにより、自分の力で通えることはできない。自宅から通いたい子どもが、二次募集で行ける高校は非常に限られており、答申にある交通網の整備は事実上反している。
- ・ 不本意入学をして遠距離通学をしなければならない子どものことについて、審議会の中では全く審議されていない。
- ・ バス路線が廃止され、始発に乗っても隣接する地区の学校には通学できない。下宿代は10万円かかる。本吉の子どもたちの学校選択の幅は大変狭い。答申の全県一学区化で、それが解決できるかが疑問である。すべての子どもたちに学校選択の幅を拡大することは幻想に過ぎない。
- ・ 遠距離であるため、意見聴取会に来たくても来られない人がいる。気仙沼や登米でも意見聴取会を開催してほしい。
- ・ 生徒の希望に合う高校で、自宅から無理なく通える高校を生徒は望んでいる。自宅から通える範囲で、生徒の希望をかなえる多様な高校を作ることが行政の役割である。
- ・ 受験競争が学力を向上させる、学区を撤廃することもその仕掛けの一つであるということが入選審の議事録の中から見て取れる。
- ・ テストの点数が自分の価値になることが子どもたちのストレス、いじめや荒れの原因の一つになっている。
- ・ 地方の高校に来る先生の多くは初任であり、3～4年経つと戻ってしまうのが実態である。魅力ある学校を作りたいのであれば、人事に関しても考えていかねばならない。それが学校間格差を生んでいるのではないか。
- ・ 今求められている学力は受験勉強だけでは得られるものではない。問題を解決し、さらに新たな疑問が生まれることを学習のモチベーションとしたい。子どもたちがいろいろな人と語り合う時間を大切にしたい。
- ・ 地元の人たちが、将来地元で働く子どもたちを育てていく高校を残してほしい。

石垣好良氏

- ・ 日本の教育は子どもが過度な競争、ストレスにさらされ、正常な発達が妨げられていると二度も国連の子どもの権利委員会から勧告を受けている。
- ・ いじめや不登校、閉じこもり、中退など石巻管内の状況は深刻で、学校は対応に追われ、親も教師も心を痛めている。これらの背景には過度な詰め込みや受験によるストレスがある。
- ・ この答申はこれらの子どもたちの状況をますます深刻化させ、学区が撤廃されれば、受験競争が激化し、中学生だけでなく、小学生、幼稚園の子どもたちにも大きな影響を及ぼす。
- ・ 給食費の未納と滞納が急増している。県内の要保護、準用保護の家庭がこの5年で2倍になっている。学区が撤廃され、結果として遠距離通学する子どもが増えれば、家庭の経済的負担はさらに増える。経済格差が教育格差につながることを心配している。
- ・ 入試の当事者である子どもたちの意見を十分に聴いていない。宮城県で出している「子どもの権利に関する条約」のパンフにあるように、もっと時間をかけ主役である子どもたちの意見をじっくりと聞くべきである。
- ・ 石巻地方の議会で公聴会を求める意見書が全会一致で採択されている。石巻市の教育長も全県一学区の

導入の弊害を指摘し、市教委として学区撤廃に強く反対している。

- ・ 一部の子どものために、多くの子どもを犠牲にしてはならない。弱肉強食で子どもは救われない。慎重に判断し、学区を撤廃しないこと、拙速に結論を出さないこと、子どもを含め広く国民の意見を聞くことを求める。

須田佑氏

- ・ 教育は自由に、創造的に自分でものを考えるという人間を育てるためになされるべきと考える。そのためには規制はない方がよい。少ない方がよいと考える。自由な教育の環境を親にも教える側にも両方に提供することが正しい方法である。学校の選択の自由もその一つである。
- ・ あの先生の授業が受けない、あの学校で学びたいという希望が尊重され、その希望がかなえられる機会が各自に均等に与えられなければいけない。それが、肌の色、宗教、ジェンダー等でその機会が差別されることは許されない。
- ・ 学ぶ人間も、自分ではどうしようもない住んでいる地域ということで区別されることは不合理である。この点だけでも学区制は廃止されるべき。いずれは他県の高校、例えば盛岡一高とかに行けるようになってほしい。
- ・ 分かりやすい数字として有名大学の進学率が物差しになっているが、それは本質をとらえていない。高校3年間の間にどれだけ生徒の心をとらえたかという結果を学校の尺度とするべきである。
- ・ 10年後は旧帝大への進学等は過去のものとなり、例えばプリンストン大等を志願する時代になるのではないかと思う。重箱の隅をつつくような入試問題で尺度を測る時代は終わると思うし、終わらなくてはおかしい。
- ・ 経済的な格差と心の格差を同じレベルで論ずることは到底できない。具体的には、遠距離でも自分のお金をかけずに自分の行きたい学校に通うことを援護するものを作ってやるのが大人の使命である。
- ・ 宮城県は一般的に閉鎖的であるという問題が指摘されている。狭い地域の学校の中での先輩、後輩という人脈が強くなりすぎて、どうしても閉鎖的な社会になってしまう。人的な移動による流動的な創造性のある地域社会を作ることが必要である。
- ・ 教育は理想を追うことが大切であると考えてるので、理想を話した。

木村正樹氏

- ・ 県として高校改革をどうするのがまず初めにあるべきである。それには入学する段階と、高校教育をどうするかという段階と、卒業後の進路をどうするかという3つの段階があり、学区の見直しは其中で考えていくべきもので、単に学区だけをやめればよいと考えれば方向性が見えなくなる。
- ・ 県から出された答申にはなぜ撤廃しなくてはならないのかという説得性はないと思う。
- ・ 一つは通学区域の見直しと撤廃とは違うということである。答申でいうところの交通網の発達は仙台圏だけの話であり、遠距離通学は保護者の負担を増すものであるから、それを促進するような答申は問題である。遠距離通学をしなくてはならない生徒の立場を考えて答申を出してほしい。
- ・ 魅力ある高校づくりはうたい文句になっており、各高校で努力されていると思うが、それがまだ見えない状況の中で規制を取り払うと、仙台の方に流出してしまう。石巻では大体1割ぐらいが仙台圏に行っている。学区が撤廃され、地域の子供が仙台に行ってしまうという状況が生まれてしまうと困るので、もっと時間をかけ、学校づくりを進めていく中で考えていければよいと思う。
- ・ 学校づくりといっても結局は教員が行うものである。かつての教員は同じ学校に10年、20年と勤務

したが、しかし、現在の教員は3～4年で異動してしまう。そのような実態の中できちんとした学校づくりができるのか疑問を感じる。

- ・ 小・中学校の場合は市町村に話をすればよいが、高校の場合、地域と高校の在り方が難しいというところがある。高校は県が管轄しているので、県が音頭を取らないと同じ地域にいても他の高校と一緒に何かやりたいと思ってもできない。
- ・ 現在小、中学校もなくなっており、高校も減らしていくということになると思う。学区が撤廃され、地域の高校の魅力がなくなり、その中で少子化となり石巻地区の高校が減っていくということになれば、自分たちの子どもが通学できる学校がなくなってしまう。
- ・ 今は地域の中で自分たちの子どもが通える学校をどうやって作っていくかということを経験、教育委員会、地域と連携してやっていかないといけない。それをお願いしたい。
- ・ 宮城県の場合は仙台と仙台以外の問題だと思う。撤廃よりも現行制度の中で、3%枠を増やし、行きたい子どもが行けるという状況を作ることがよいと思う。
- ・ 答申では難しいと書いてあるが、仙台市の北と南を一つにしても別に問題はないと思う。石巻の子どもが気仙沼や大崎の高校に行くことはほとんどあり得ない。基本的には仙台に行くか、地域の中の高校に通うかというだけの問題だと思う。全県一区でやってしまうのは少し乱暴である。
- ・ 現在の推薦制度は公平性の点で問題があり、学区よりも改善が必要である。

遠藤学氏

- ・ 教育行政は制度として影響を受ける子どもたちの立場で考えることが最も重要な視点である。学区制の拡大、将来的撤廃は子どもたちの高校受験の選択肢が増えるため、行きたい学校を選べることになる。学区制撤廃は子どもたちへの権利付与となる。
- ・ 石巻地区の場合、高校の選択肢が少ないこともあり、自分の実力にあった高校を選ぶことが難しく、そのため、県内外の私立高校に進学する子どもたちがいる。
- ・ 子どもたちの視点で学区制を変えていくためには、計画的オプションと様々な人たちの様々な努力が必要になる。
- ・ まず、高校関係者、教員には生徒を呼ぶための努力が必要になる。これは進学率を看板にするものではない。学校の特色は進学率もあるが、専門科目が学べることにある。例えば地域学なども開講し、歴史や産業等を学ぶこともあり得るし、宅建や他の資格を取るための授業を開講することもあり得る。早い時期から起業家を養成することも可能である。それが将来を見据えた高校の特色となる。
- ・ 日本の高校は普通科高校が主流で、現在問題になっているニートやフリーターは普通科の中でも進学できない学校の出身者が多く、何らかのケアがなされていない場合が多い。将来の人生設計に対するアドバイスをする授業があってもよいと思う。
- ・ 石巻のような地方都市は交流人口を確保しないと人材を確保することができない。学区制撤廃による仙台への流出を心配するのではなく、逆に仙台から人を呼ぶための施策と考えるべきである。
- ・ 行政には、実力があっても経済的に行きたい高校へ行けない生徒に対する助成金や奨学金など、進学したい生徒に対する支援政策立案が求められる。
- ・ 地元を離れ、他地域で学ぶ生徒を支援する一方で、そのような人たちが地元に戻ってくるようにするため、奨学金の優遇、返還義務の免除も必要である。日本の公的教育支出は欧米と比較しても最低レベルであり、この点は改善してほしい。
- ・ 学区制の撤廃により、子どもたちの多様な要求に応えるためには、教職員の努力を求めただけでなく、

自治体行政としての取組が求められる。県行政だけでなく、自治体同士の連携、地域全体で次世代育てる意識が必要である。産業界にも協力を願い、外で学んでも地元に戻り、学んだことを還元する人材を雇用する機会を生み出す努力も必要である。高校の段階で学区制を守っても、県外の大学に行く人は、石巻地方に雇用がないため、そのまま市外や県外に行ってしまう。NGOや自治体には高校生のインターンを受け入れる協力も必要である。

- ・ 学区制の段階的廃止とともに、県内のどの高校においても単位の互換性の導入を提案したい。どの高校に入学してもどの高校の、好きな先生の好きな科目を選択できるようにすれば、仙台への一極集中もある程度緩和できるのではないかと考える。
- ・ 学校の選択肢が増えることで、今以上に家族と進路について話し合うこと、真剣に調べることになる。行政は情報公開が必要になり、教育行政の透明度を高めることになる。教育行政の活性化にもつながる。
- ・ バウチャー制度のような市場原理を導入するような教育改悪は、反対である。

<質 疑>

櫻井弥生委員

混乱を避けるために、どの程度の段階的廃止を考えているのか、その間はどの程度の拡大か。

遠藤学氏

何年後にはこうなるという計画が先にできた上で、発表するのであれば混乱を押さえられる。3%枠を満たすところが余りないので、それを拡大し、全県一区にというイメージである。

山田光彦委員

競争は不登校、いじめにつながるという意見についてどう考えるか。

志賀勝利氏

競争がいじめ、不登校につながるかは分からないが、そのすべてではないと思う。いじめはなくなるものではない。学区制撤廃がいじめを助長するということは別の話ではないか。

佐々木悦子委員

地域だけの学区の拡大は生まれた地域による差を拡大してしまうことになるのではないか。

木村正樹氏

地域に通いたい学校がないから、仙台の高校に行っている。学校の力、教員の力がないからである。受皿がないまま制度だけ撤廃することは、弊害を生むと思う。

小野寺征人委員

現在の学区制のままでよいのか、改善するポイントはあるか。郡部の子どもの制約をどう考えるか。

猪又聡氏

3%枠の活用はほとんどが推薦である。一般入試は入れる高校となる。3%を拡大しても推薦が増えるだけではないか。仙台とその周辺の学区は、ある程度交流した方が生徒のためにもよいのではないかという意見もある。改善ということであれば、地元に行きたい学校を作ってほしい。拡大と撤廃は根本的に違う。

藤村重文委員長

魅力ある学校づくりには人事が大切だということだが、具体的にはどうか。

猪又聡氏

大体3～4年で異動する。校長先生は2～3年で代わり、校長が代われれば職場が変わる。学校をどのように作っていくかということの場合、5年から10年は必要なのではないか。気仙沼、本吉は地元の教員

は少なく、生徒や保護者はこの先生はいいなと思った時点で転勤してしまう。魅力ある学校づくりは長いスパンで学校を見てくれる地域の人たちが必要、そのつながりを断ってはならない。

櫻井弥生委員

学区撤廃によって競争がストレスになるという意見と、たくましさを育てるという意見をどう思うか。

遠藤学氏

専門ではないのでどういう影響を与えるかは分からないが、ゆとり教育による学習量を減少させたことは失敗だったと思う。競争は必要であり、潜在能力を伸ばすこともある。競争のない社会はあり得ない。受験戦争の激化と経済的な市場原理は意味が違う。親の経済状況が教育に悪影響を及ぼすことに近づいている面もあり、オプションをやりながらでないと格差は大きくなる。今の段階で実施は危険であると感じる。ある程度の計画を立て、明確にする、学習支援も必要である。

小野寺征人委員

学区を撤廃した際に石巻地区のメリットとデメリットはどうか。

須田佑氏

メリットはあると思うが、デメリットは余りない。予備校に行っている生徒は仙台に通学している。

木村正樹氏

行きたい子は仙台に行っている。長期的な意味で、高校再編によって、自分の地元の高校に行きたい子の希望がかなえられなくなることが問題である。対策を考えずに一つだけを先行させるとそうなる。

佐々木悦子委員

答申や教育委員会の検討の中で、これが欠けているということがあれば教えてほしい。

石垣好良氏

子どもたちの意見を聞くことが足りない。石巻から現在どれだけの生徒が仙台に出ているのかというデータを示してほしい。旧河南町や旧北上町から仙台に通学する場合、送り迎えをしなければならず、親の経済的負担、時間的負担は大きい。そのようなデータも示すことが必要である。意見聴取会の回数を増やし、広く意見を聞いていただきたい。

<傍聴者からの意見>

一般傍聴者

拠点校は失敗するのではないか。自分の地区にある拠点校が信頼されていない状態で、学区を撤廃すると一極集中は起きる。答申素案を出した後で各県の担当者に聞いているなど、他県の状況についてきちんと調査をしていない。宮城県は他県と違う傾向を持っている。撤廃は全国的な動向とはいえない。3%は全国で最も低いですが、それは宮城県が一極集中することを懸念したからある。それを一気に撤廃するのは無謀である。学力と経済力はリンクしており、地方ほど格差は拡大しているといえる。

一般傍聴者

高校教育には基礎学力の底上げを期待する。地元の産業の発展の原動力は人材であり、そのためには基礎学力向上が必要である。学区が撤廃されると不登校が多くなる。石巻には中途退学者の多い高校もある。それは地域の高校であるからである。

一般傍聴者

中学生を持つ親が意見聴取会のことを知らなかった。ほとんどの人は分かっていない。PTA等で話し合うことが必要である。50年も続いた制度を変えるのであれば、もっとじっくり話し合うことが必要である。撤廃には反対である。